

首都圏での新型コロナウイルス感染の再拡大が話題である。特に「夜の街」に働く人々や客の感染が多いと聞く。酒を飲まず、国分町にも数十年、足を踏み入れていない私は「また非常事態になったらどうすんだよ。学校もまた休校になるかもしれないじゃないか！」と怒りながら、報道を聞いていた。

しかし「夜の街」で働く人々は、平時から法律のグレーゾーンに置かれ、存在を「見て見ぬふり」をされたり、行政やマスコミのさじ加減ひとつで、摘発されたり、泳がされたりと不安定な立場で働いている。（賭けゴルフ・賭け麻雀・パチンコの換金などもグレー？違法行為でしょ？）混雑した満員電車で通勤する会社員、密度の高い仕事場での労働は倫理的な責めを負わないのに、今回のような事態では「夜の街」で働く人々は、大きな非難を浴び、国の補助対象から外れ、「自己責任」を求められる。

「夜の街」で誇りをもって働く人、また社会的不利を抱えて生計維持のために働く人…。また、そこでしか癒やしを得られない客の需要もある。私のような公務員にとっては「不要不急」なことに映ってもそこにいる人にとっては切実な「死活問題」に違いない。最前線の医療従事者、月 200 時間超過勤務の厚労省職員、倒産寸前の事業者…みな、ある意味で「命がけ」である。

「職業に貴賤はない。人はみな平等。」と子供たちに教えてきながら、自分の中にまだまだ「闇」の部分があることを思い知らされた。

※「夜の街」から考える【コロナと新宿】 7月1日・2日 河北新報より一部引用